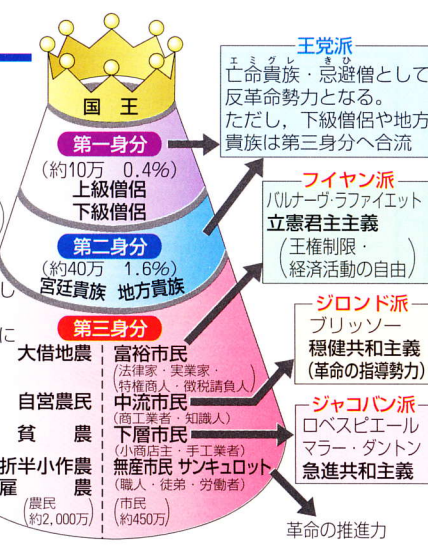


1 フランス革命の進展

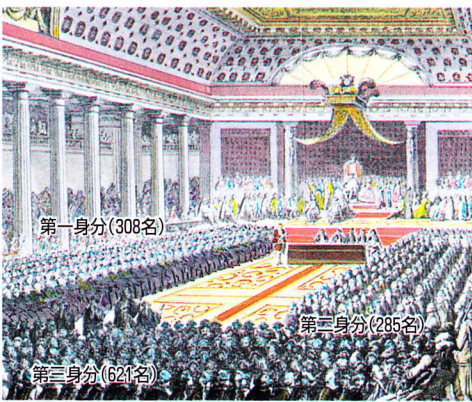
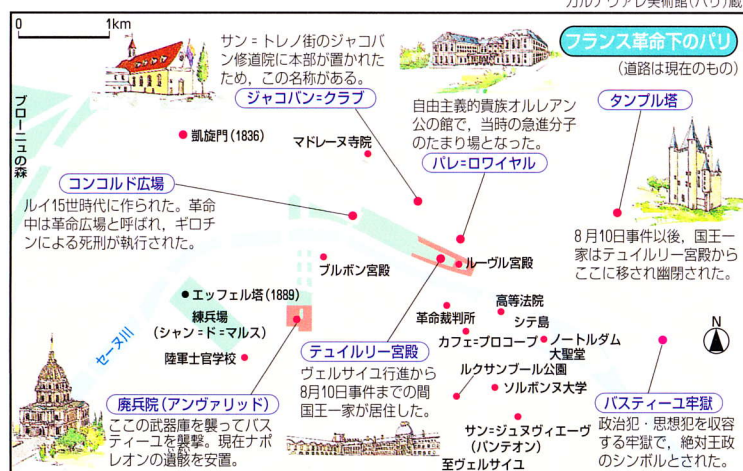
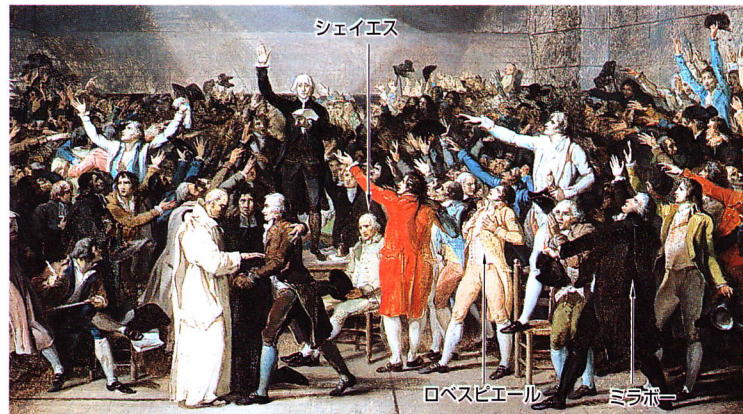
王政の苦悩	1774	テュルゴー、財務総監(～76)	革命の第1段階
	1777	ネッケル、財務総監(～81, 88～89)	
	1786	英仏通商条約	
	1787	カロンヌ、名士会を開催	
	1789	アペ＝シェイエス「第三身分とは何か」刊行(☞P242 26史)	
	三部会	1789. 5. 5 三部会召集(ヴェルサイユ宮殿)	
	89. 6. 17	6. 17 第三身分による国民議会設立宣言	
		6. 20 球戯場(テニスコート)の誓い	
		7. 11 ルイ16世、財務総監ネッケル罷免	
		7. 14 バスティーユ牢獄襲撃(フランス革命勃発)	
国民議会	8. 4 封建的特権の廃止宣言	革命の第2段階	
	8. 26 人権宣言採択		
	10. 5～6 ヴェルサイユ行進(十月事件)		
	11. 2 教会財産の国有化決議		
	12. 5 アッシニア債券発行		
	1790. 7. 12 聖職者基本法決議		
	1791. 4. 2 ミラボーの死		
	6. 14 ル＝シャブリエ法(団結禁止法)採択		
	6. 20～21 ヴァレンス逃亡事件		
	8. 27 ピルニッツ宣言 (奥のレオポルト2世と普の) 対仏共同警告		
戦争と王政の没落	91. 9. 30	9. 3 新憲法(1791年憲法)決議	革命の第3段階
	91. 10. 1	10. 1 立法議会成立	
	立法議会議決	10. 31 亡命貴族の財産没収	
	ファイヤン派	1792. 3. 23 ジロンド派内閣成立	
	中央派	4. 20 オーストリアに宣戦布告	
	345	8. 10 8月10日事件(王権停止)	
	左翼共和派	9. 20 ヴァルミーの戦い(革命軍初勝利)	
	136	9. 20 国民公会召集	
	92. 9. 20	9. 21～22 王政廃止と共和政宣言	
	革命の激化	92. 9. 21	
1793. 1. 21		1. 21 ルイ16世処刑	
2. 13		2. 13 第1回対仏大同盟結成 (英首相小ピット提唱)(～97)	
2. 24		2. 24 徴兵制採用	
3. 10		3. 10 革命裁判所設置	
4. 6		4. 6 公安委員会設置	
5. 4		5. 4 最高価格令	
6. 2		6. 2 ジャコバン派独裁(恐怖政治)	
6. 24		6. 24 1793年憲法(ジャコバン憲法)決議	
7. 17		7. 17 封建的貢租の無償廃止	
フランス共和国(第一共和政)	8. 1	8. 1 メートル法採用決定	革命の第5段階
	10. 5	10. 5 革命暦(共和暦)採用決定	
	11. 10	11. 10 理性の崇拜	
	1794. 3～4	3～4 エベール派・ダントンの派の逮捕・処刑	
	7. 27	7. 27 テルミドール反動(9日)	
	7. 28	7. 28 ロベスピエールら処刑	
	1795. 8. 22	8. 22 1795年憲法(共和国第3年憲法)決議	
	95. 10. 27	10. 27 総裁政府成立	
	1796. 3. 11	3. 11 ナポレオンのイタリア遠征(～97)	
	5. 27	5. 27 パープフの陰謀失敗、翌年処刑	
1797. 10. 17	10. 17 カンボ＝フォルミオの和約		
1798. 5. 19	5. 19 ナポレオンのエジプト遠征(～99)		
1799. 6. 1	6. 1 第2回対仏大同盟結成		
11. 9	11. 9 プリュメール18日のクーデタ		
99. 11. 9	12. 25 統領政府樹立		

2 アンシャン＝レジーム(旧制度)

革命前のようす



球戯場の誓い(ダヴィッド画) 国民議会は憲法制定まで解散しないことを誓い合った。



三部会(1789. 5. 5) ルイ13世の召集停止(1615)以来久しぶりに召集されたこの三部会では、身分別議決を主張する特権身分と1人1票制を主張する第三身分が激しく対立した。

バスティーユ牢獄襲撃 1789年7月14日、国王による国民議会武力弾圧に怒ったパリ市民は、絶対主義の象徴であったバスティーユ牢獄を襲撃、フランス革命が勃発した。



史料 フランス人権宣言

第1条 人は、自由かつ権利において平等なものとして出生し、かつ生存する。

第3条 あらゆる主権の原理は、本質的に国民に存する。

第17条 所有権は、一的神聖で不可侵の権利である……。

解説 ラファイエットの起草した「人権宣言」(人および市民の権利宣言)は1789年8月26日、憲法制定(国民)議会が採択された。自由で平等な個人の結合に基づく国民と国民国家の創出をめざした。

フランス革命の主役たち



● **ミラボー** (1749~91) 自由主義貴族、国民議会成立に貢献。立憲君主政を志向、裏で国王と取引をしていた。目指し国民議회를指導。



● **ラファイエット** (1757~1834) 米独立戦争に参加した自由主義貴族。立憲君主政を国王と取引をしていた。目指し国民議회를指導。



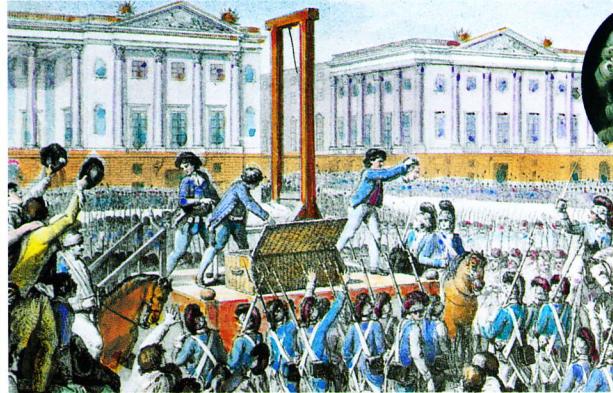
● **「マラーの死」** (ダヴィド画) 恐怖政治初期の大立者。入浴中にジロンド派の女性コルデーに殺された。



● **ダントン** (1759~94) 山岳派でありながらジロンド的傾向を示したためロベスピエールと対立、処刑された。



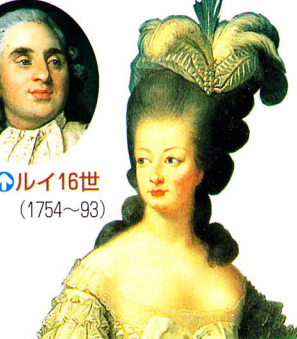
● **ロベスピエール** (1758~94) ジャコパンの山岳派指導者で恐怖政治を断行。テルミドール反動で処刑。



● **ルイ16世の処刑** 国民公会の議決により1793年1月21日11時頃、軍隊・群衆がこたがえす革命広場(現コンコルド広場)で国王はギロチンにかけられた。



● **ルイ16世** (1754~93)



● **マリ=アントワネット** (1755~93) オーストリア女帝マリア=テレシアの末娘でルイ16世の王妃。派手好きの性格で国民の非難を浴びた。

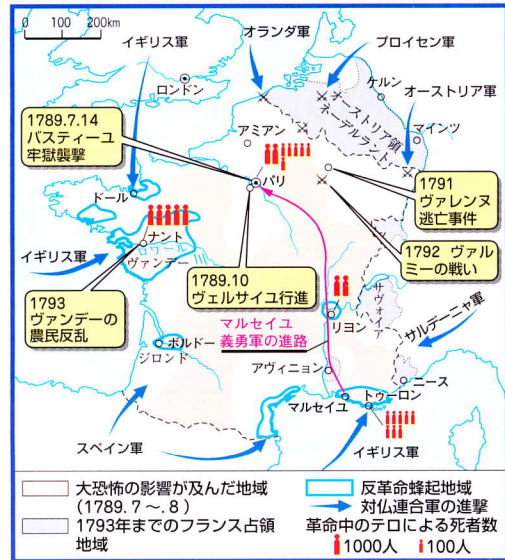
3 革命時の三憲法

憲法	1791年憲法 (1791.9.3)	1793年憲法 (1793.6.24)	1795年憲法 (1795.8.22)
制定	国民議会(ラファイエットら)	国民公会(ジャコパン派)	国民公会(テルミドリアン)
政体	立憲君主政	共和政(急進的)	共和政(穏健的・ブルジョワ的)
選挙	制限選挙・間接選挙	男子普通選挙制(21歳以上)	制限選挙・間接選挙
議会	立法議会(一院制)	国民公会(一院制)	五百人会議・元老院(二院制)
特徴	●自由主義貴族や上層市民主導 ●人権宣言を前提	●自然権の保障(主権在民・平等 権・労働権・請願権・教育権)	●権力の分散(5人の総裁) ●制定後に国民公会を解散

4 三大市民革命

革命	イギリス革命 (P140)	アメリカ独立革命 (P152)	フランス革命
時期	1642~49 ピューリタン革命 1688 名誉革命	1775 レキシントンの戦い 1783 パリ条約	1789 バスティュー年獄襲撃 1799 統領政府樹立
王朝・国王	ステュアート朝 チャールズ1世(ピューリタン革命) ジェームズ2世(名誉革命)	イギリス・ハノーヴァー朝 ジョージ3世	ブルボン朝 ルイ16世 マリ=アントワネット
主体	ジェントリ・ヨーマン・ブルジョワジー	植民地人の中の愛国派	ブルジョワジー・小市民・貧農
性格	「権利の章典」で立憲王政と伝統的諸権利を保障	「独立宣言」で革命の正当性を国内・国外に主張	「人権宣言」でブルジョワの権利を明記するが、やがて過激化
外国の動き	ヨーロッパが三十年戦争中で諸外国からの干渉なし	仏・スペイン・オランダ3国の支援 武装中立同盟(ロシアが中心)	革命の自国への波及を恐れた諸外国による対仏大同盟結成
意義	●ブルジョワジーの権利の保障による資本主義基盤の形成	●「アメリカ合衆国憲法」の制定(人民主権・三権分立を明記) ●フランス革命に精神を輸出	●人権を天賦の普遍的な権利として明確に規定 ●絶対王政・封建的身分制の掃

5 革命期のフランス



フランス革命の国民統一的事業 (P195)

A 政治的統合

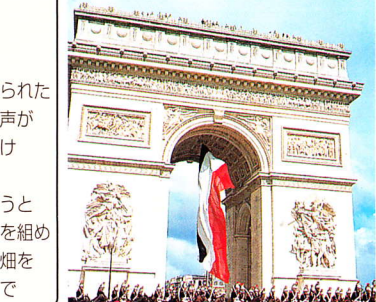


● **ラ=マルセイーズ**
いざ 祖国の子供らよ
栄光の日はやってきた
われらに対して暴君の
血に染まった旗は掲げられた
暴虐な兵士たちの叫び声が
広野にとどろくのを聞け
彼らは迫っているのだ
われらの子や妻を殺そうと
武器をとれ市民よ 隊を組め
進め 進め われらの焔を
けがれた血でみたままで

B 文化的統合

● **三色旗**は、1789年ラファイエットが国王とパリ市の関係修復のためにパリ市の軍隊の色である赤・青の間にブルボン家の色である白をはさんだことに始まる。ラ=マルセイーズは、工兵大尉リールが1792年に作った「ライン軍歌」をマルセイユの義勇兵たちが歌ったことに由来する。

C 経済的統合



革命的記念日(7月14日)の儀仗兵

● **革命暦(共和暦)**
ヴァンデミエール(葡萄月) 9~10月
ブリュメール(霧月) 10~11月
フリメール(霜月) 11~12月
ニヴォーズ(雪月) 12~1月
プリュヴィオーズ(雨月) 1~2月
ヴァントーズ(風月) 2~3月
ジェルミナル(芽月) 3~4月
フロリアル(花月) 4~5月
プレリアル(草月) 5~6月
メシドール(収穫月) 6~7月
テルミドール(熱月) 7~8月
フリュクティドール(実月) 8~9月

● **メートル法の発表を知らせるピラ**
1793年国民公会が採用した革命暦(共和暦)は、1792年9月22日、共和国成立の日を紀元第1日とし、キリスト教の時間枠からの脱却をめざした(時間の革命)。1806年に廃止。



1 ナポレオン時代の推移 (P154~161年)

台頭期	第一共和政	1769.8	ナポレオン=ボナパルト、コルシカ島で生誕		
		1784.10	パリ士官学校に入校(翌年卒業)		
		1793.12	トゥーロン港の攻囲戦で成功		
		1794.9	ロベスピエール派として2週間投獄される		
		1795.10	ヴァンデミエールの王党派の反乱を鎮圧		
		1796.3	ジョゼフィーヌと結婚(26歳) イタリア遠征開始(~97)		
		1797.10	カンポ=フォルミオの和約 (第1回対仏大同盟解消1793~)		
		1798.5	エジプト遠征開始(~99.10.19) (P19号)		
		.8	アブキール湾の戦い		
		1799.6	第2回対仏大同盟(英首相ピット提唱)(~1802)		
権力掌握期	統領政府	.11	ブリュメール18日のクーデタ(総裁政府を倒す)		
		.12	統領政府を樹立(第一統領に就任)		
		1800.2	フランス銀行の創立		
		.5	第2次イタリア遠征 .6 マレンゴの戦い		
		1801.2	リュネヴィル条約 .7 コンコルダート(宗教協約)		
		1802.3	アミアンの和約(第2回対仏大同盟解消1799~)		
		.8	終身統領となる(国民投票の結果)		
		1803.4	西ルイジアナ(旧スペイン領)を合衆国に売却		
		全盛期	第一帝政(ナポレオン帝国)	1804.3	ナポレオン法典の制定
				.5	国民投票により皇帝となる(第一帝政開始)(34歳)
1805.8	第3回対仏大同盟				
.10	トラファルガーの海戦(英提督ネルソンに敗北)				
.12	アウステルリッツの戦い				
1806.3	兄ジョゼフ、ナポリ王となる				
.6	弟ルイ、オランダ王となる				
.7	ライン同盟結成 .8 神聖ローマ帝国の消滅				
.10	イェナの戦い .10 アウエルシュタットの戦い				
.11	大陸封鎖令(ベルリン勅令)				
没落期	ブルボン朝	1807.7	ティルジット条約 .7 ワルシャワ大公国成立		
		.10	プロイセン改革開始 (シュタイン・ハルデンベルクの指導)		
		1808.5	スペイン反乱(イペリア半島戦争)の開始(~14)		
		.6	兄ジョゼフ、スペイン王となる		
		1809.12	ジョゼフィーヌと離婚		
		1810.4	マリ=ルイーズ(オーストリア=ハプスブルク家)(18歳)と結婚(40歳) .7 オランダを併合		
		.12	ロシア、大陸封鎖令にそむき、対英貿易再開		
		1812.5	ロシア遠征開始(~.12)		
		1813.2	第4回対仏大同盟(~14) .3 解放戦争の開始		
		.10	ライプチヒの戦い(諸国民戦争)		
1814.4	ナポレオン退位				
		.5	ナポレオン、エルバ島配流、ブルボン朝復活(ルイ18世)		
		.9	ウィーン会議(~1815.6)		
		1815.3	ナポレオン、エルバ島脱出、百日天下(~.6)		
		.6	ワーテルローの戦い (ウェリントン率いる英軍と普軍に敗北)		
		.10	セントヘレナ配流		
1821.5	ナポレオン、セントヘレナで死去(51歳)				



ナポレオンのアルプス越え 1800年第2次イタリア遠征でサン=ベルナル峠を越えるナポレオンを描いた。

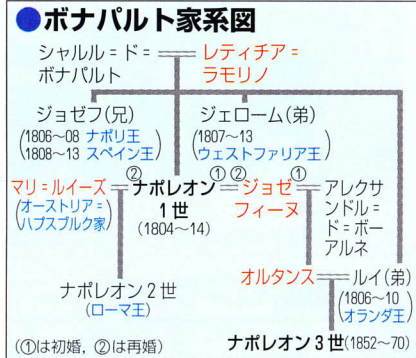
「ナポレオンの戴冠式」ダヴィド 1804年5月皇帝になったナポレオンは、12月2日パリのノートルダム大聖堂に教皇ピウス7世を招いて戴冠式を行った。この時ナポレオンは、教皇の手を借りず自ら冠を頭に載せ、皇后ジョゼフィーヌにも自らの手で冠をかぶせた。しかし、ナポレオンは1809年ジョゼフィーヌと離婚し、翌年オーストリア皇女マリ=ルイーズと結婚。

ほぼ等身大で描かれている

2 対仏大同盟

※おもなものは下の表の4回だが、1806~07(第4回)、1809(第5回)、1815(第7回)を加えると7回となる。したがって下の表の第4回は第6回となる。

対仏大同盟	第1回 (1793~97)	第2回 (1799~1802)	第3回 (1805)	第4回 (1813~14)
おもな参加国	英・普・墺・蘭・露・西(参)・蘭(参)	英・墺・露・トルコ・ポルトガル(普は中立)	英・墺・露・スウェーデン (普は中立)	英・普・露を中心にデンマークを除く諸国
結成の動機	ルイ16世の処刑	ナポレオンのエジプト遠征	ナポレオンの皇帝即位	ナポレオンのロシア遠征失敗
おもな戦い	アルコレの戦い (1796)	マレンゴの戦い (1800)	トラファルガーの海戦 (1805) アウステルリッツの戦い (1805)	ライプチヒの戦い (1813)
解消(年・月)	カンポ=フォルミオの和約(1797.10)	アミアンの和約 (1802.3)	プレスブルク条約 (1805.12)	ナポレオン退位 (1814.4)



A フランス産業とナポレオン

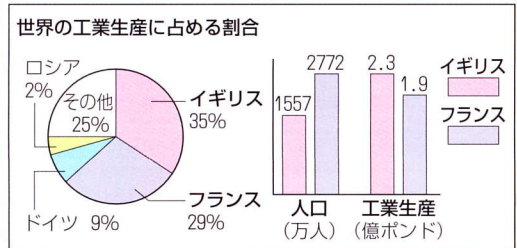
ナポレオンによる大陸制覇の最大の目的は、先進工業国イギリスに対抗したフランスによるヨーロッパ市場の独占にあった。1806年の大陸封鎖令はその典型的政策で、全国的統一法典として所有権の絶対を規定したナポレオン法典やフランス銀行の創設(1800)と合わせてフランス産業育成への意欲がうかがえる。

史料 大陸封鎖令(ベルリン勅令)(1806年)

- イギリス諸島を封鎖状態におくことを宣言する。
- イギリス諸島とのあらゆる貿易、通信は禁止される。したがって、イギリス宛、イギリス人宛の、もしくは英語で書かれた書簡あるいは郵便は郵送されず、差押えられる。

(『世界歴史辞典』平凡社)

B 1800年のイギリスとフランス



史料 ナポレオン法典(1804年3月「フランス人の民法典」として公布)

II 家族の尊重 213. 夫は妻を保護し、妻は夫に服従する義務を負う。

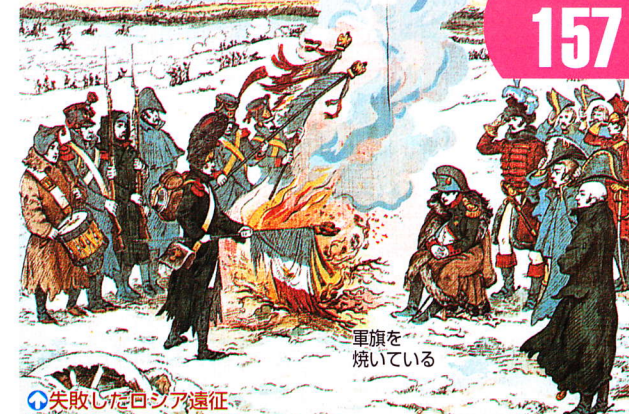
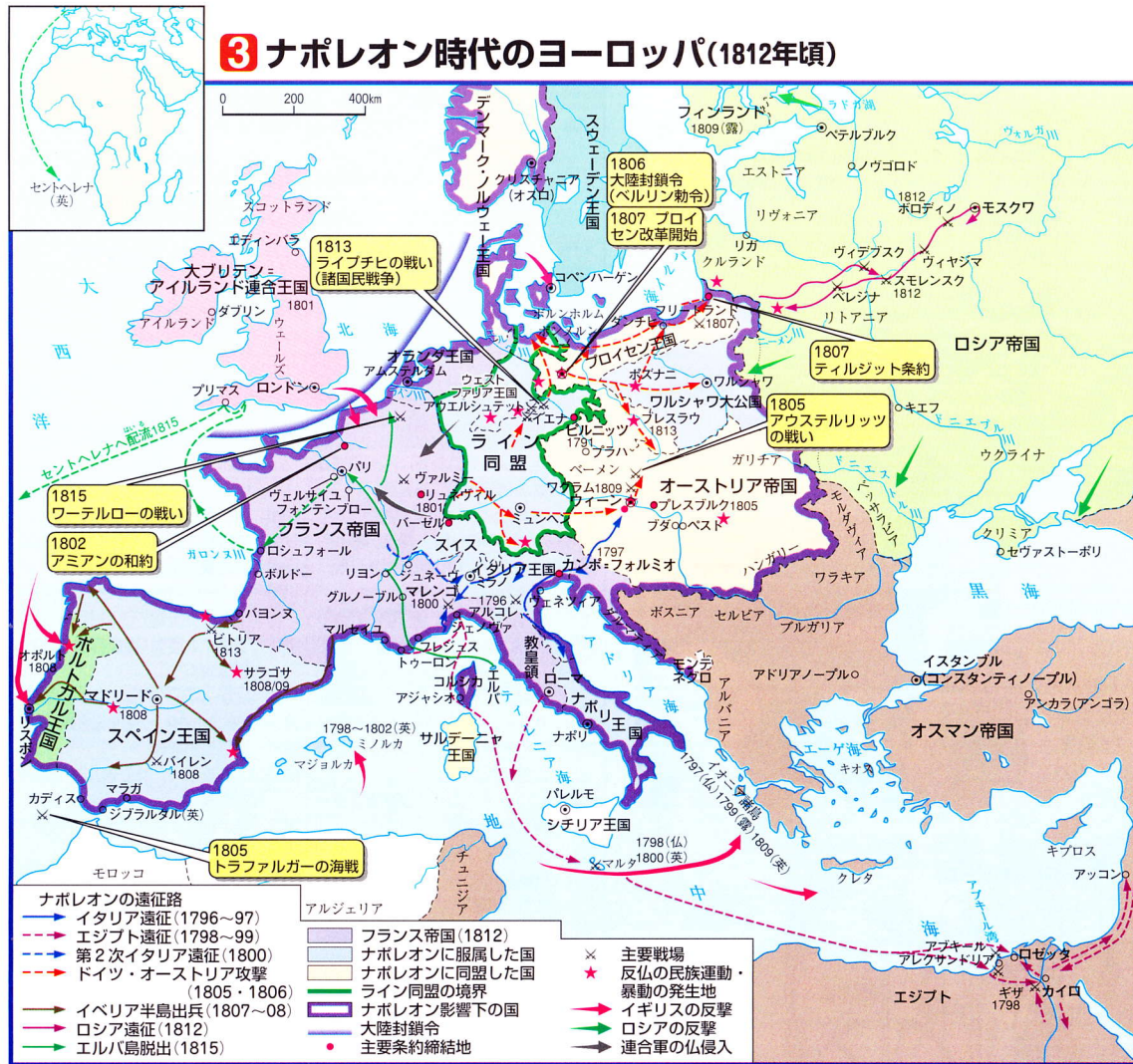
III 所有権の絶対 人間は願望を持って生まれてくる。それは食べたり着たりすることができなければならない。ゆえに人は自己の生存とその維持にに必要な物に対する権利を有する。それが所有権の起源である。…だから所有権自体は自然の直接的な制度である。…

IV 契約の自由 1134. 適法に締結された合意はそれをなした当事者間では法律たるの効力を有する。

(『世界歴史事典』平凡社)

解説 近代市民社会の法の規範となったことから、「ハンムラビ法典」(P21号)「ローマ法大全」(P381表)と並んで世界三大法典の1つに数えられる。

③ ナポレオン時代のヨーロッパ(1812年頃)



失敗したロシア遠征

ロシア遠征におけるナポレオン軍の兵力消耗



遠征開始 2月12日
モスクワ退却開始 10月19日

解説 大陸封鎖令に違反したロシアへの懲罰として行われたこの遠征でナポレオンはロシア側の巧妙な退却と焦土戦術に遭い、飢えと寒さの中で1812年10月19日、全軍にモスクワからの退却を命じた。

現代に生きる「ナポレオン」

フランス・ブランデーの最高銘柄の1つ「ナポレオン」。ナポレオンと2番目の妻マリ＝ルイーズとの間に男の子(ナポレオン2世)が生まれた1811年はぶどうが豊作で、ナポレオンがこの年に作られたブランデーを「ナポレオン」と名付けさせたことが由来とされる。フランス国民のナポレオン人気は今でも根強く、ナポレオン崇拜者は珍しくない。彼の遺体が収められているパリの廃兵院へは、現在も多くの参拝者が訪れる。



「1808年5月3日の処刑」ゴヤ 1808年以降民族主義的抵抗(半島戦争)が続き、ナポレオン軍による熾烈な報復が行われた。スペイン (1814年)縦266cm, 横345cm プラド美術館(マドリッド)蔵



諸国民から見たナポレオン

「彼もまた凡人にすぎなかったか！」ナポレオン皇帝即位の報に激怒したベートーヴェンはこう叫んで完成したばかりの楽譜「ボナパルト」(後の「英雄」)の表紙を引き裂いたという。ベートーヴェン(ドイツ)彼は自由精神・人間解放の実現をナポレオン＝ボナパルトに託していた。当初「フランス革命の精神である自由・平等をヨーロッパに広める解放者」として諸国民に迎えられたナポレオン軍も大陸制覇の後は各地で抑圧的支配を強め、やがて皮肉にも革命精神により覚醒した諸国民の民族主義的抵抗によって大きな打撃を受けることとなった。



史料 ナポレオンの名言集

- 「兵士らよ、このピラミッドの上から4000年の歴史が諸君を見下ろしている」 エジプト遠征中の「ピラミッドの戦い」(1798)で兵士を激励した言葉。
- 「不可能という言葉は、フランス語にはない」 一般に「余の辞書に不可能の文字はない」として知られる。ナポレオンが日ごろから口にしていた言葉とされ、彼の強い自信を象徴している。
- 「さらば我が子らよ！ 私は諸君を皆の胸に抱きしめたい。せめて諸君の軍旗に接吻させてもらいたい」 1814年4月20日、退位にあたってフォンテンブロー宮の庭で近衛兵に告げた別れの言葉。
- 「余の真の栄誉は40回の戦いの勝利ではなく…永久に生きるのは余の民法典である」 セントヘレナ島への流刑後、『回顧録』の中で述べた言葉。「ナポレオン法典」をいかに誇りに思っていたかがわかる。